

浜口陽三「2匹の蝶」 1977年 メゾチント

銅版画体験教室(モノクロームメゾチント) 2012年9月14日(金)

モノクロームメゾチント技法を使って、製版から刷りまでを行う初心者向けの教室です。1回の講習でポストカード大の作品を完成させます。

日時:2012年9月14日(金)14:00~17:00 ※13:00開館

講師:江本創(アーティスト)

会場:ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション1階

定員:18名(先着順)

受付:9月1日(土)11:00~電話でお申し込みください

※定員になり次第受付終了

参加費:1800円+入館料

持ち物:下絵(サイズ12×7.5cm、モノクロ)、汚れても良い服装、エプロン。

※休館日の開催となりますが、展示はご欄いただけます。併設のカフェはお休みですので予めご了承ください。



Q1.メゾチントってどんな技法?

A1. 銅版画の技法のひとつ。ビロードのような画面が特徴です。

銅の板に施した凹部分にインクをつめ、凸部分の余分なインクはふき取って強い圧力で紙に刷るのが銅版画。メゾチント技法では、最初に版全面にぎざぎざの傷をつけ(目立て)、ビロードのような黒い画面をつくります。(今回の体験教室ではあらかじめ目立て加工のしてある銅板を使用します。)

明るく(白く)したい所は「スクレーパー」という道具でぎざぎざを削り、インクが溜まる量を減らします。ぎざぎざが浅く、密度が低くなるほど明るく(白く)なり、微かな削り加減で美しいグラデーションの表現が可能です。えんぴつで黒くぬりつぶした画面に消しゴムで絵を描くようなイメージです。

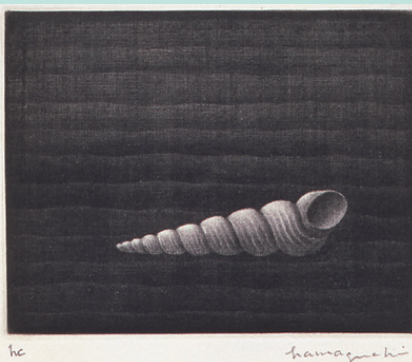
Q2.どんな下絵を用意したらいいの?



A2. 浜口陽三の作品を参考にしてみましょう。

左上:「猫」1937年

ドライポイント技法による作品。(今回の教室ではこの技法は使いません)銅の板に先のとがった針のような道具で引っ掻き、そこにインクが溜まり、刷ると黒くなります。「線」で描くのに向いた技法です。



左下:「巻貝」1959年

メゾチント技法による作品。(今回の教室で使う技法です)暗い背景のから白い巻貝が浮かびあがります。よくみると、線ではなく、黒の「濃淡」で描かれています。貝のまるみを帯びた形、影、背景のグラデーションは、メゾチントの得意とする表現です。どちらかというと「線」の表現には向きません。

下絵を描くときは 白・・・グレー・・・黒の、色の濃淡を意識して、えんぴつなどで塗り分けてみてくださいね。

そのほか分からないことがありましたら美術館までお問い合わせください。